

ソーシャルワークにおける“意思”の理論構造の再検討

○ 法政大学大学院人間社会研究科博士後期課程／和泉短期大学 安西 美咲 (009787)

キーワード：ソーシャルワーク、中動態、意思決定の支援

1. 研究目的

自己決定の尊重や意思決定への対応は、ソーシャルワーカーの倫理として言われているが、“意思決定の支援”について考える時「人が様々な選択肢の中から、自らの意思で選ぶこと」と安易に捉えていないだろうか。意思決定の理論を整理しないまま、言葉のイメージだけで捉えると、支援としても選択肢を与えるだけの“意思決定の押し付け”になってしまうだろう。「人はどのように自分の意思を決めるのか」、すなわち“意思決定”のメカニズムと理論及び“意思”について捉え直すことで、ソーシャルワークにおける意思決定の支援に対する価値と理論が見えてくるはずであり、ソーシャルワーク実践における意思決定の支援の在り方を検討していくことができると考える。

そこで本研究は、“意思”の理論構造を根本的に問い直し、ソーシャルワークにおける意思決定の支援について考察していく。

2. 研究の視点および方法

米本(2018)は、「決める」という感覚は、多様な様相を取り得ると述べている。何かを「決めている」感覚、「決められない」感覚、「決めさせられる」感覚等々、多様な「決める」ことの様相があり、そのことから単純に「私が主体的に決める」とは言えないとしている。そのため、「決める」関係は、能動—受動では単純に割り切れない曖昧性若しくは流動性をもつものとして把握しなければならないと述べている。

その「決定」への様々な感覚が人の“意思”なのだろうか。「意思とは何か」ということを「中動態」を援用しながら整理していく。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理規程に従い、引用・参考文献等を厳密に明記するなどの倫理的配慮を行った。

4. 研究結果

意思決定に関する研究では、意思決定のモデルとしてある、規範的（人間が何をすべきか）、記述的（人間が実際に何を行っているか）、処方的（人間がすべきことをするためにどのように支援するか）アプローチが代表的なものとして挙げられる（E.A ウィルヘルムスら,2013）。記述的アプローチ研究の一つである行動意思決定論研究では、「人間の意思決定が極めて状況依存的であり、種々の心理プロセスが生じることを示している」とし（竹

村,2009:187)、人が行う意思決定は、無意識的で感情的な決定と、合理的判断や論理的思考の中で行う2種類が存在していることを示している。

これらの研究からは人の“意思”はとても曖昧なものであることがわかるが、その“意思”の曖昧さを國分(2017)は「能動態と受動態の二分法式では表せない感情」として「中動態」から紐解き、「意思とは何か」を示唆している。

能動態と受動態の対立は「する」か「される」であるのに対し、能動態と中動態の対立は「外」か「内」かが問題となる(國分ら,2020)。國分(2017:245-252)は、スピノザの哲学でポイントとされる変状の概念から中動態を解釈している。人は本来、意思によって行為を選択するのではなく、自分の持つ変状する能力によって、常に必然性をもって自分の反応があり、その変状する力によってもたらされた反応こそが行為の選択であるという。だからこそスピノザは意思のある選択(自由意思)というものは存在せず、その必然性を自らが知り、外部からの刺激だけでなく自分自身の変状する能力により変状できるようになることが人間の自由と定義している。これらの中動態の考え方から國分(2017:131)は、「意思と選択は明確に区別されなければならない」としている。

5. 考察

意思決定の支援においては《決定・結果》つまり能動的に「決めること」や「その行為の結果」が大事なのではないことが明らかとなった。むしろそれは、スピノザ的に言えば“自由”ではなく“強制”であると考えられる。E.A ウィルヘルムスら(2013)による意思決定の要因・過程と結果の整理によれば、「その意思決定の過程がしっかりと踏まれていたか。その過程を踏むためにはその要因として挙げられる能力や環境などが整っていたか。最終的にはその意思決定の結果のどのような行動や感情が出てきたのか。そして、自分の中でその行動や感情に折り合いがつけられ、その意思決定が合理的であったと自分自身が納得できるか」ということが意思決定の条件となると考えられるが、これを中動態の視点から捉えた場合、ソーシャルワークにおける意思決定の支援として必要となるのは、利用者の変わりゆく感情を捉えながら支援していくことであると言える。さらに踏み込めば、利用者の感情や行動は移ろいゆくものであり、そこに寄り添う支援者には覚悟が求められると言えるだろう。

【引用・参考文献】

- E.A.ウィルヘルムス・V.F.レイナ(編) 竹村和久・高橋英彦(監訳)(2013)『認知心理学のフロンティア 神経経済学と意思決定 心理学,神経科学,行動経済学からの総合的展望』北大路書房.
- 國分功一郎(2017)『中動態の世界—意志と責任の考古学』医学書院.
- 國分功一郎・熊谷晋一郎(2020)『＜責任＞の生成—中動態と当事者研究』新曜社.
- 竹村和久(2009)『行動意思決定論—経済行動の心理学』日本評論社.
- 米本秀仁(2018)『自己決定(権)論』の問題圏—そのアポリアへの制度的アプローチ』『北星学園大学社会福祉学部北星論集』55,1-18.